

 書評

Shirilla Joan J, Weatherston Deborah J 編, 廣瀬たい子 監訳

乳幼児精神保健ケースブック

フライバーグの育児支援治療プログラム

吉田敬子

本書は、妊産婦と3歳以下の子どもを育児中の母親と家族に対する援助のための治療の理念と実際を豊富な事例により紹介している。本書で紹介されている治療プログラムは、ミシガン州で Selma Freiberg とその同僚たちによって考案され、幼い子どもを養育中の親に対し、初期の養育のサポート、愛着関係の発達強化、子どもの発育不全に対する留意、親による虐待やネグレクトなどリスクの軽減といったことを目的としている。そのため乳幼児精神保健のスペシャリストの専門性の内訳は、心理学、児童福祉、幼児教育、小児科、精神科など多岐にわたる。乳幼児精神保健に携わるスタッフであれば、詳細な紹介事例と演習問題により、あたかも研修セミナーに参加し、その事例を自分なりに考えるという能動的な読書体験も可能である。また日々の臨床の対象が主として成人である治療者は、本書により、うつ病や物質依存の心理社会的な発症モデルについて、世代間伝達の精神病理も含めて理解を深めることができよう。

構成としては、まず第1章で乳幼児精神保健の基本理念が明記されている。それは、子どもの誕生とその後数年間の育児中の出来事は、その後の子どもの人生に大きな影響を及ぼすが、養育者がこれまでに未解決の喪失体験や心的な外傷体験の出来事があると子どもとの初期の愛着関係に歪みが生じるため、この要となる人生の初期の時期に治療的にかかわることにより、その後の関係性の障害のリスクを軽減するということである。

第2章からは、1章に1事例ずつ詳細な治療経過が提示され、おのおのの事例の後に自己学習用あるいはグループでディスカッションするための演習問

題がついている。この演習問題を先に読み、それを念頭に置いて事例を読むのも効果的な自己学習につながる方法となるかもしれない。ところで本書で紹介されているのは、いずれもわが国でも遭遇するかもしれない事例である。その中に、自らも否定的な被養育体験があり、父親がそれぞれ異なる4人の子どもをほとんどネグレクトの状態で育児中の母親への治療例が紹介されているが、この母親は元来聡明であり育児のサポーターもいた。このようなレジリエンスを粘り強くかつセンス良く引き出すような支援のあり方は、乳幼児精神保健の醍醐味であろう。逆に、聴覚障害、発達遅滞、胎児性アルコール症候群、両親からの性的虐待、解離性障害があり、養子となっている若い女性が妊娠、子どもの父親から暴行を受けるという、「複合的な問題を持つ母親」への育児支援例がある。どう考えても安全な育児はできないとの地域精神保健の見解も知りつつ治療し、結局子どもは保護されることになったが、こうなると支援者の殉教的な信念さえ感じる。

最後に特記したいのは、事例などにみられる記述である。乳幼児精神保健のスペシャリストは、五感を大切に周囲を感じるとある。そして、訓練で培われた観察眼と、支援対象者とその周囲で起こっていることについての正確で詳細な記述が必要であるが、その記述の力量は並大抵ではない。監訳の労を取られた広瀬たい子氏の仕事への並々ならぬ熱意と努力も含めて読者が学ぶところは大きい。

(九州大学病院精神科神経科)

●A5 238頁 2007 定価3,570円(本体3,400円+税) 金剛出版